

古文I

「古文Ⅰ」の特長と使い方

●本書のねらい

このテキストは、高等学校で本格的に古文を学習するために必要な古文の基礎を、完全に身につけることができるように編集されています。

古文も昔の人が使用した日本語には違いありませんが、その入門期の学習において、外国語にとりくむのと同じような心がまえが必要だといわれています。このテキストでは、今までまったく古文になじみがない人も、無理なく古文読解力をつけることができるように、古文の「A、B、C、……」ともいえる「歴史的かなづかい」に始まる最も基礎となる事項に多くのページをさき、冒頭で述べたこのテキストのねらいが達成できるように工夫してあります。

●本書の特色

○このテキストは、「古文入門編」「読解の基礎編」「読解演習編」で構成されています。

○「古文入門編」「読解の基礎編」では、高校生必読の作品から入試、教材などでよくとりあげられる箇所を、例文や問題文としてとりあげています。

○各単元とも見開きの二ページで区切りがつくようにまとめ、学習計画がたて易くなっています。

○今後の古文の学習に役立つように、例文や問題文の「出典」が明示してあります。

●本書の構成と使い方

古文入門編

……ここで、古文を読むために必要な最も基礎的な知識を修得します。歴史的かなづかい、古語と現代語の違い、古典の常識などを完全に身につけて、次の「読解の基礎編」に進んでください。

読解の基礎編

……古語と古文のいろいろな表現に対する理解を深め、文語文法の要点をまとめることで、古文読解の基礎を固めます。学習した事項が、後の単元の設問で何度も繰り返し演習できるようになっています。

読解演習編

……ここまで学習した古文読解の基礎を、ジャンル別の総合問題で確認します。弱点がある場合は、「読解の基礎編」で再度学習しておくことが大切です。

《解答・解説(別冊)》……解答例とともに、詳しい「解説」と「口語訳」がついています。

目次

古文入門編

① 歴史的かなづかい	4
② 古語と現代語(1)	6
③ 古語と現代語(2)	8
④ 音便	10
⑤ 語の省略	12
⑥ 古典の常識(1)	14
⑦ 古典の常識(2)	16
⑧ 口語文法と文語文法の違い	18

読解の基礎編

① 動作主(主語)をとらえる(1)	20
文語文法の要点① 用言―動詞(1)	22
② 動作主(主語)をとらえる(2)	24
文語文法の要点② 用言―動詞(2)	26
③ 重要古語(1)	28
文語文法の要点③ 用言―動詞(3)	30
④ 重要古語(2)	32
文語文法の要点④ 用言―形容詞・形容動詞	34

読解演習編

⑤ いろいろな表現(1)	36
文語文法の要点⑤ 助動詞(1)	38
⑥ いろいろな表現(2)	40
文語文法の要点⑥ 助動詞(2)	42
⑦ いろいろな表現(3)	44
文語文法の要点⑦ 助動詞(3)	46
⑧ いろいろな表現(4)	48
文語文法の要点⑧ 助動詞(4)	50
⑨ いろいろな表現(5)	52
文語文法の要点⑨ 敬語法	54
⑩ 敬語表現に慣れる	56
文語文法の要点⑩ 係り結び(1)	58
⑪ 助詞による表現(1)	60
文語文法の要点⑪ 係り結び(2)	62
⑫ 助詞による表現(2)	64
文語文法の要点⑫ 韻文(和歌) 読解の基礎	66

① 随筆・日記(1)	68
② 随筆・日記(2)	70
③ 随筆・日記(3)	72
④ 物語	74
⑤ 韻文	76
⑥ 説話	78

1 歴史のかなづかい

●現代語と異なるかなづかい

「現代かなづかい(新かなづかい)」が現代語の発音に基づくかなづかいであるのと同様に、「歴史的かなづかい(旧かなづかい)」も、原則として、平安時代(中期以前)の発音に基づくかなづかいである。この「歴史的かなづかい」に慣れることは、古文を学習する上でとても大切なことだ。「歴史的かなづかい」の基本的法則を学んで、古文がなめらかに音読できるようになろう。

●ポイント①

☆正しい「五十音図」が書けるようになろう

五十音図									
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

↓ 「ワイウエオ」と発音する

↓ 「い」と「え」は「ア行」と同じ

注意

五十音図の「あ・か・さ・た……」の行を、それぞれ「ア行・カ行・サ行……」と呼ぶ。また五十音図を横に見て、「ア段・イ段・ウ段……」と呼ぶ。

例題 1 「ワ行」の「ゐ」と「ゑ」を三度ずつ記せ。

(1) 「ゐ」 () () ()

(2) 「ゑ」 () () ()

例題 2 「五十音図」の「ア段」を、「ア行」から「ワ行」まで順に記せ。

(あ) () () () () () () () () ()

(い) () () () () () () () () ()

(う) () () () () () () () () ()

(え) () () () () () () () () ()

(お) () () () () () () () () ()

●ポイント②

[1] 語中や語尾にある「はひふへほ」は「ワイウエオ」と発音する

ただし、二つ以上の語が合わさった場合(複合語)を除く。

例 「あはれ」↓「アワレ」 「かほ」↓「カオ」

「あさひ」↓「アサヒ」(「朝」+「日」の複合語)

[2] 母音が「a+u」「i+u」「e+u」と連続する場合、それぞれ

「ō(オー)」「yū(ユー)」「yō(ヨー)」と発音する

例 ●「あうむ」(鳥の名)↓「オーム」 「かうい」(更衣)↓「コイイ」

●「いう女」(遊女)↓「エージュ」 「いふ」(言ふ)↓「ユー」

●「うつくしう」(美しう)↓「ウツクシユー」

●「えうなし」(要なし)↓「ヨーナシ」

●「けふ」(今日)↓「キヨー」 「てふ」(蝶)↓「チョー」

[3] 「くわ」「ぐわ」は「か」「が」と発音する

例 「くわほう」(果報)↓「カホー」 「ぐわん」(願)↓「ガン」

例題3

次の古語を現代かなづかに改めて記せ。

- (1) うへ(上) () (2) にほひ(匂) () ()
- (3) あふぎ(扇) () (4) まひ(舞) () ()
- (5) あうぎ(奥義) () ()
- (6) えうきよく(謡曲) () ()

ポイント③

☆動詞の活用語尾のかなづかい

[1] 「イ」と発音するもの

- a 「い」と書くもの ↓ ヤ行の「射る・鏝る・老ゆ・悔ゆ・報ゆ」の五語の活用語尾。
- b 「ゐ」と書くもの ↓ ワ行の「居る・率る・率ゐる・用ゐる」などの活用語尾。

(注) 右以外の「イ」と発音する語尾は全て「ひ」と書く。

[2] 「エ」と発音するもの

- a 「え」と書くもの ↓ ア行の「得・心得」の二語と、「ヤ行下二段活用動詞」の語尾全て。
- b 「ゑ」と書くもの ↓ ワ行の「植・飢・掘」の三語の活用語尾。

(注) 右以外の「エ」と発音する語尾は全て「へ」と書く。

[3] 「ジ・ズ」と発音するもの

- a 「じ・ず」と書くもの ↓ 「交ず」などの「サ行下二段活用動詞」の語尾と、「論ず」などの「サ行変格活用動詞」の語尾。
- (注) 右以外の「ジ・ズ」と発音する語尾は全て「ぢ・づ」と書く。

例題4

次の語の漢字の部分に歴史的かなづかいで読みがなを記せ。

- (1) 賜る (2) 俄に (3) 遠し (4) 遂に
- (5) 通る (6) 庭 (7) 貝 (8) 授く
- (9) 水 (10) 塩 (11) 左右 (12) 乙女

例題5

次の文の——線部①～⑤を歴史的かなづかに改めて記せ。

- (1) 飢え死ぬるものたぐい、①数をも知らず。
(「方丈記」)
- (2) 前裁など、心とどめて②植えたり。
(「源氏物語」)
- (3) かきつばたと③いう五文字を句の上に④掘えて、旅の心をよめ。
(「伊勢物語」)

練習問題

○次の文の——線部①～⑥の読みを現代かなづかに改めて記せ。

今は昔、いつのころほひの①ことにかありけむ。きよみづ(清水)に②まゐり(参り)たりけるをんなの、③をさなき子を抱きて④みだう(御堂)の⑤まへの谷をのぞき立ちけるが、いかにしけるやありけむ、兎を取り落として谷に落として入れてけり。
(「今昔物語集巻一九・四一話」)

- ① 「きよみづ」 () (2) 「まゐり」 () ()
- ③ 「をんな」 () (4) 「をさなき」 () ()
- ⑤ 「みだう」 () (6) 「まへ」 () ()

4 音便

●「動詞」「形容詞」「助動詞」の音便

「音便」は単語のうちのある音が、発音しやすいように変化すること
をいう。おもに「動詞」「形容詞」の活用語尾にみられ、また、数は少な
いが「助動詞」にも音便がある。「助動詞」の音便は形が決まっているか
ら用例を覚えてしまおう。

●ポイント①

[1] 「音便」の種類

「イ音便」…活用語尾が「い」に変化する。

例 「歩いて」↓「歩いて」

「ウ音便」…活用語尾が「う」に変化する。

例 「争ひて」↓「争うて」 「楽しくて」↓「楽しうて」

「撥音便」…活用語尾が「ん」に変化する。

例 「飛びて」↓「飛んで」

「促音便」…活用語尾が「つ」に変化する。

例 「行きて」↓「行つて」

[2] 動詞の「音便」

動詞の「音便」は、「イ音便」「ウ音便」「撥音便」「促音便」の四種
類全てがある。

① 「イ音便」…「四段動詞(カ、ガ、サ行)」の連用形語尾が「い」
に変化する。

例 歩いて↓歩いて 歩きたり↓歩いたり
仰ぎて↓仰いで 仰ぎたり↓仰いだり

② 「ウ音便」…「四段動詞(ハ、バ、マ行)」の連用形語尾が「う」
に変化する。

例 争ひて↓争うて 争ひたり↓争うたり
賜ひて↓賜うで 賜ひたり↓賜うだり

③ 「撥音便」…「四段動詞(バ、マ行)」や「ナ行変格活用動詞」の
連用形語尾が「ん」に変化する。

例 飛びて↓飛んで 飲みたり↓飲んだり
死にて↓死んで 死にたり↓死んだり

④ 「促音便」…「四段動詞(タ、ハ、ラ行)」や「ラ行変格活用動詞」
の連用形語尾が「つ」に変化する。

例 立ちて↓立つて 回りたり↓回つたり
ありて↓あつて ありたり↓あつたり

[3] 形容詞の「音便」

形容詞の「音便」は、「イ音便」「ウ音便」「撥音便」の三種類があ
る。

① 「イ音便」…連体形の語尾「き」が「い」に変化する。

例 青き山↓青い山 美しき人↓美しい人

② 「ウ音便」…連用形の語尾「く」が「う」に変化する。

例 早く行く↓早う行く 美しくなる↓美しうなる

③ 「撥音便」…連体形の語尾「かる」が「かん」に変化する。
例 青かるめり↓青かんめり

例題1 次の各文の——線部の音便の種類を記せ。

- (1) わが身のほど、いとど悲しうて、人にも語れず。 (音便)
- (2) 三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。 (音便)
- (3) 木曾殿、今井が手を取つてのたまひけるは…… (音便)
- (4) 死んで花実は咲かぬ。 (音便)
- (5) 聖、高い声にて読経したまひけり。 (音便)

●ポイント②●

☆助動詞の「音便」

助動詞の「音便」は、「イ音便」「ウ音便」「撥音便」の三種類がある。用例が決まっているので、暗記しよう。

① 「イ音便」…「べし」「まじ」の連体形の語尾「——き」が「い」に変化する。

例 行くべきかな ↓ 行くべいかな

死ぬまじきぞ ↓ 死ぬまじいぞ

② 「ウ音便」…「べし」「まじ」「まほし」「たし」の連用形の語尾「——く」が「う」に変化する。

例 行くべく思ふ ↓ 行くべう思ふ

行かまほしく思ふ ↓ 行かまほしう思ふ

③ 「撥音便」…「ず」「たり」「べし」「まじ」「なり」の連体形の語尾「——る」が「ん」に変化する。

例 行かざるなり ↓ 行かざんなり (|| 行かざなり)

望月なるめり ↓ 望月なんめり (|| 望月なめり)

(注)「助動詞」の活用については、のちに学習する。↓P.42 ↓

例題2 次の文の——線部①～⑤の音便が含まれている部分を、例にならって、もとの形に改めよ。また、その音便の種類も記せ。

新中納言、使者を立てて「能登殿、いたう罪な作りたまひそ。さりとてよき敵か。」とのたまひければ、「さては大將軍に組めごさんなれ。」と心得て、源氏の船に乗り移り、乗り移り、をめき、叫んで攻め戦ふ。判官の船に乗りあつて、あはやと目をかけて飛んでかかるに、判官かなはじとや思はれけん、味方の船の二丈ばかり退いたりけるに、ゆらりと飛び乗りたまひぬ。
(「平家物語」より抜粋・改稿)

例 われと思はん者どもは寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。

番号	音便を含む部分	もとの形	音便の種類
例ア	寄つて	寄りて	促音便
例イ	組んで	組みて	撥音便
①	いたう		音便
②	叫んで		音便
③	乗りあつて		音便
④	飛んで		音便
⑤	退いたりける		音便

必修古語の確認

○ 次の語を古語辞典で調べ、その意味を記せ。

- (1) したたむ ()
- (2) まうす ()
- (3) よそふ ()
- (4) てうず ()
- (5) あはす ()

読解の基礎編

① 動作主(主語)をとらえる(1)

●省略されやすい「主語」

口語文法でいう「主語」を古典文法では「動作主」と呼ぶことが多い。さて、古文ではその「動作主」をしばしば省略する。その理由は、「動作主」を言葉として明確に示さないことが、「動作主」に対する敬意を表すことになると考えられていたからだ。しかし、古文を解釈するとき、隠された「動作主」を明らかにしつつ解釈することが大切なことは言うまでもない。常に「動作主」を意識しながら古文に接する習慣をつけよう。

●ポイント①

☆場面の状況に注意しよう

- [1] 「いつ・どこで・だれが」「なにを」「どのように」したのか。こうした場面ごとの基本的な状況に注意しよう。「動作主」は複数にわたる場合が多いので、人物関係には特に注意したい。
- [2] 現代日本語と英語を比較してみてもわかるように、日本語の時制はかなりあいまいだが、古語の時制は現代語よりさらにあいまいである。「いつ」を考えると、「動作の順序」に注意しよう。

基本演習1

次の文を読んであとの問いに答えよ。

九月二十日のころ、ある人にさそはれたてまつりて、明くるまで月

見ありく事はべりしに、おぼしいづる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうち薫りて、しのびたるけはひ、いとものあはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事さまの優におぼえて、物のかくれよりしばし見わたるに、妻戸をいまま少しおしあけて、月見るけしきなり。

問一 線部①～⑥に対応する動作主はなにか。次の中からあてはまるものを選び、記号で答えよ。

- ア 作者 イ ある人 ウ 月 エ 荒れたる庭
オ わざとならぬ匂ひ カ 「荒れたる庭」の屋敷に住む人

- ① () ② () ③ ()
④ () ⑤ () ⑥ ()

問二 線部 a～d の読みを、現代かなづかいで記せ。

- a () b ()
c () d ()

(着眼点)

問一 「動作主」は「述部」から推理しよう。

問二 「陰暦の月の名」は思わぬところで問われる。

基本演習2

次の文を読んであとの問いに答えよ。

この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。

21 動作主(主語)をとらえる(1)

「とは何物ぞ」とひとの問ひければ、「さる物をわれも知らず。もしあ
らましければこの僧の顔に似てむ」とぞいひける。

〔徒然草〕第六〇段

問一 線部①・②の「動作主」を記せ。

① () ② ()

問二 線部③・④は、具体的に誰をさすか。文中の語で答えよ。

③ () ④ ()

問三 線部を口語訳せよ。

()

・着眼点

問一 「動作主」を考える際、指示語に注意しよう。

問二 古文独特の言いまわしに慣れよう。

基本演習3

次の文を読んで、その問いに答えよ。

さて二十日ばかりありて、この女のゐたる方に、雀のいたく鳴く声
しければ、雀こそいたく鳴くなれ、ありし雀の来るにやあらむと思ひ
て、出でて見れば、この雀なり。「あはれに忘れず、来たるこそあは
れなれ」といふほどに、女の顔をうち見て、口よりつゆばかりの物を
落としおくやうにして飛びて往ぬ。

〔宇治拾遺物語〕卷三・一六話

問一 線部①・⑤の「動作主」を記せ。

① () ② () ③ ()

④ () ⑤ ()

問二 線部を口語訳せよ。

問三 「この女」の心内語(心の中で思った言葉)を文中より抜き出して

記せ。

()

・着眼点

問一 会話文中「」の中の「動作主」には十分注意しよう。

問二 「つゆ」のような語の「副詞」としての用法に慣れよう。「副詞」
部分の口語訳は入試によく出題される。

問三 「格助詞(引用)の「と」がある場合は、その直前が会話文であ
ったり、心内語であったりするので注意しよう。

必修古語の確認

○次の語を古語辞典で調べ、その意味を記せ。

- | | | | | |
|-----------|-------|-----|-------|-----|
| (1) つゆ | 〔名詞〕・ | () | 〔副詞〕・ | () |
| (2) ゆめ | 〔名詞〕・ | () | 〔副詞〕・ | () |
| (3) をさをさ | () | () | () | () |
| (4) いたく | () | () | () | () |
| (5) やうやう | () | () | () | () |
| (6) やがて | () | () | () | () |
| (7) いま | 〔名詞〕・ | () | 〔副詞〕・ | () |
| (8) とく | 〔副詞〕・ | () | () | () |
| (9) いと | () | () | () | () |
| (10) つつ | () | () | () | () |
| (11) なかなか | () | () | () | () |

文語文法の要点①

用言―動詞(1)

● 要点のまとめ ●

[1] 動詞の働きと性質 → 確認演習 [1]

● 動詞は「人」や「物」の

- ① 動き
- ② 状態の変化
- ③ 存在

を示す働きをする。

● 動詞はその前後の語によって、形を変える。これを「動詞の活用」という。

● 動詞は述語になる。

● 動詞は連用修飾語で修飾される。また、名詞を修飾する。

[2] 動詞の活用と活用の種類 → 確認演習 [2][3][4][5]

● 活用形

未然形 ↓ 動作が未だ終わらない形

連用形 ↓ 用言に連なる形

終止形 ↓ 言い切った形

連体形 ↓ 体言に連なる形

已然形 ↓ 動作が已に終わった形

命令形 ↓ 動作を命令する形

● 活用の種類(活用型)

四段活用 ↓ ア、イ、ウ、エの各段で活用する。

上一段活用 ↓ イ段で活用する。

上二段活用 ↓ イ、ウの各段で活用する。

確認演習

[1] 次の文を読んで、文中の動詞を全て抜き出して記せ。

つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。
(徒然草「序段」)

(注)「日暮らし」は「副詞」とする。

() () () () () () () () () ()

[2] 次の文の――線部①～⑩の動詞の活用形を記せ。

名を聞くより、やがて面影は推しはかるる心地するを、見るときは、また、かねて思ひつるままの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、このごろの人の家の、そこほどにてぞありけんと覚え、人も、今見る人の中に思ひよそへらるるは、誰もかく覚ゆるにや。
(徒然草「第七一段」)

(注)「やがて」↓そのまま。「そこほど」↓あのあたり。

「思ひよそへらるる」↓思いあわせられる。

- ① () 形
- ② () 形
- ③ () 形
- ④ () 形
- ⑤ () 形
- ⑥ () 形
- ⑦ () 形
- ⑧ () 形
- ⑨ () 形
- ⑩ () 形

[3] 次の文の――線部①～⑨の動詞の活用の種類を記せ。

九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の、今朝は止みて、朝日いとけざやかにさし出でたるに、前栽の露こぼるばかり濡れかかりた

[3] 動詞の「活用の種類」の識別 → 確認演習④

四段活用 ↓ 「未然形」がア段に響く。
 上一段活用 ↓ 動詞が限定できる。
 上二段活用 ↓ 「未然形」がイ段に響く。
 下一段活用 ↓ 動詞が限定できる。
 下二段活用 ↓ 「未然形」がエ段に響く。
 カ行変格活用 ↓ 動詞が限定できる。
 サ行変格活用 ↓ 動詞が限定できる。
 ナ行変格活用 ↓ 動詞が限定できる。
 ラ行変格活用 ↓ 動詞が限定できる。

〔暗記事項〕 → 確認演習⑤

上一段活用動詞 ↓ 着る・似る・煮る・干る・見る・居る・射る・用ゐる・率ゐる・率ゐる
 下一段活用動詞 ↓ 蹴る
 カ行変格活用 ↓ 来
 サ行変格活用 ↓ す(愛す)「信ず」などの複合動詞
 ナ行変格活用 ↓ 死ぬ・往ぬ・去ぬ
 ラ行変格活用 ↓ 有り・居り・はべり・いますがり

るも、いとをかし。透垣^{すいがい}の羅文^{らもん}、軒^{のき}の上に、かい^⑧たる蜘蛛^{くも}の巢^⑦のこぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉を^⑨つらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。

(「枕草子」第一三〇段)

(注)「けぎやかに」↓はつきりと・あぎやかに。

- ① () 活用) ② () 活用) ③ () 活用)
- ④ () 活用) ⑤ () 活用) ⑥ () 活用)
- ⑦ () 活用) ⑧ () 活用) ⑨ () 活用)

④ 次の文の——線部①→⑨の動詞の活用の種類を記せ。

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわた^①りけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに^②来けり。芥川といふ川を率^③て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。

(「伊勢物語」第六段)

(注)「え得まじかりけるを」↓結婚できそうにもない(女)を。

- ① () 活用) ② () 活用) ③ () 活用)
 - ④ () 活用) ⑤ () 活用) ⑥ () 活用)
 - ⑦ () 活用) ⑧ () 活用) ⑨ () 活用)
- ⑤ 次の各文の——線部の動詞の活用表を暗記せよ。
- ① 身死して財残るとは、智者のせ^①ぎるところなり。(「徒然草」)
- ② 必ず来^②べき人のもとに車をやりて待つに……(「徒然草」)

番号	語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
①	せ	せ	し	す	する	すれ	せよ
②	来	こ	き	く	くる	くれ	こ(よ)

読解の基礎編

5 いろいろな表現(1)

●「動詞」の特殊な用法

これまでに「動詞」の特殊な用法として、「動詞の音便」(P.10)、「自動詞」と「他動詞」(P.30)、「補助動詞」(P.31)、「複合動詞」(同)について学んだ。ここではさらに、連語としての「動詞の音便」と、使用頻度の高い「複合動詞」についての知識を深めておこう。これらは、必ず口語訳に役立つだろう。

●ポイント①

☆連語化した「ある」「なり」「助動詞」

ラ行変格活用動詞の「あり」の連体形は「ある」だが、この「ある」に助動詞の「めり」「なり」「べし」が接続すると、多くの場合「ある」は撥音便化し、「あん」となる。すなわち、

「ある」↑「めり」↓「あんめり」

「ある」↑「なり」↓「あんなり」

「ある」↑「べし」↓「あんべし」

ところで、平安時代前期には「ん」を示す「ん」という文字が一般化していなかったため、「ん」を表記しなかった。そこで古文ではしばしば、

「あんめり」||「あめり」

「あんなり」||「あなり」

「あんべし」||「あべし」

という「連語化した形で文中に現れる。

「助動詞」の口語訳法についてはのち(P.38以降)に学ぶとして、

ここではそれぞれの口語訳を「連語」として記憶しよう。

「あめり」↓あるようだ・あるらしい。

「あなり」↓あるのだそうだ・あるとかいう。

「あべし」↓あるだろう。

(注)「あめり」を音読するときは、もとの形に直して、「あんめり」と「ん」を補って発音する決まりがある。「あなり」「あべし」も同様。

基本演習1

次の文を読んであとの問いに答えよ。

- (1) 「もののははれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、いまひときは心も浮きたつものは、春のけしきにこそあめれ。
- (注)「言ふめれど」↓言うようだが。
(徒然草「第一九段」)

- (2) かの奉る不死の薬に、また壺具して御使いに(天皇は)賜はず。勅使には、つきのいはかさといふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂きにもてつくべきよし仰せたまふ。嶺にてすべきやう教へさせたまふ。御文・不死の薬の壺ならべて、火をつけてもやすべきよし仰せたまふ。そのよしうけたまはりて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山をふじの山とは名づけける。
- (竹取物語末尾)

(注)「かの奉る不死の薬」↓(かぐや姫が天皇に)さし上げた不老長寿の薬。「もてつくべきよし」↓持ってゆく旨。

問一 (1)の文から、副詞を二つ抜き出して記せ。

() () () ()

問二 — 線部 a「春のけしきにこそあめれ」、b「駿河の国にあなる山の頂き」を口語訳せよ。

a () ()

b () ()

問三 — 線部 c「仰せたまふ」、d「うけたまはりて」に対応する動作主はなにか。次の中からそれぞれにあてはまるものを選び、記号で答えよ。

ア 作者 イ かぐや姫 ウ 天皇
エ つきのいはかさといふ人 オ つはものども

c () () d () ()

●ポイント②●

☆「動詞」+「補助動詞」の「複合動詞」

「複合動詞」の用例は、既にP.31で学習したが、ここでは新たに用例数をふやし、「動詞」+「補助動詞」の「複合動詞」の知識を完全なものにしておこう。

「動詞」+「補助動詞」

「」+「まどふ」 ↓ ひどく……する。

「」+「わたる」 ↓ 夢中になって……する。

「」+「わたる」 ↓ 一面に……する。

「」+「わぶ」 ↓ ……し続ける。

「」+「わぶ」 ↓ たやすく……できない。

「」+「ありく」 ↓ ……してまわる。

↓ ……しながら月日を送る。

「」+「のしる」 ↓ とても……する。

「」+「わづらふ」 ↓ ……できない。

↓ ……するのに困る(悩む)。

基本演習2

次の文を読んであとの問いに答えよ。

みつさかの山の麓に夜昼、時雨あられ降り乱れて、日の光もさやかに、いみじうものむつかし。そこを立ちて、犬上、神崎、やす、くるもとなどいふところどころ、何となく過ぎぬ。湖の面はるばるとして、なで島、竹生島などいふところの見える、いとおもしろし。

勢多の橋、みなくづれてわたりわづらふ。 (二更級日記「美濃から近江へ」)

(注)「みつさかの山」↓地名。「いみじうものむつかし」↓たいそう

陰気でうつつとしい。「犬上、神崎、やす、くるもと」↓地名

問一 文中には、形容詞が三つ用いられている。全てを抜き出し、そのままの形で記せ。

() () () ()

問二 文中には、形容動詞が一つ用いられている。そのままの形で抜き出して記せ。

() ()

問三 — 線部を口語訳せよ。

() ()

文語文法の要点⑤

助動詞(1)

● 要点のまとめ ●

[1] 「助動詞」とは

「助動詞」とは、活用のある付属語で、用言や他の助動詞に接続してさまざまな意味を付加する語である。また、名詞や助動詞に接続して、述語を作る働きもある。

[2] 「助動詞」の学習法

① 「助動詞」個々の意味を暗記しよう → 確認演習①②

「助動詞」の意味は、その「文法上の呼び名」で記憶すると混乱を防ぐことができる。

② 「助動詞」個々の活用を暗記しよう → 確認演習①

「助動詞」には特殊な活用をするものがあるので、まず、それを記憶し、のちに、すでに学習した「用言」の活用形式にあてはめて、残りの「助動詞」の活用を記憶しよう。

③ 「助動詞」個々の接続関係を暗記しよう

ある「助動詞」が接続する「用言」は、その活用形が決まっている。これを法則化して暗記しよう。

● 「助動詞」を征する者は古文を征する!!

「助動詞」は「意味」・「活用」・「接続関係」の三点を中心にしてわかりと学ぼう。

[3] 「助動詞」の意味(文法上の呼び名)と基本的な訳し方

↓ 確認演習①②

意味

口語訳

例

確認演習

① 例にならって、次の助動詞の活用表を完成せよ。

番号	意味	助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
例	完了	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)
①	推量	む	(ま)	○				○
②	打消	ず	ず	ざり	○			○
③	過去	けり	(けら)					○
④	完了	り	なら					(れ)
⑤	完了	ぬ	な					(ね)

② 次の文を読んであとの問いに答えよ。

今は昔、受領の郎等して、人に猛く見えむと思ひて、えもいはず兵だてける者ありけり。

暁に家を出でて、ものへ行かむとしけるに、夫はいまだ臥したりけるに、妻起きて食物の事などせむとするに、有明けの月の、板間より屋のうちにさし入りたりけるに、月の光を、妻の、おのれが影のうつりたりけるを見て、「髪おぼとれたる大きな童盗人の、もの取らむとて、入りにけるぞ」と思ひければ、あはて迷ひて、夫の臥したるもとに逃げ行きて、夫の耳にさしあてて、ひそかに、「かしこに大きな童盗人の髪おぼとれたるがもの取らむとて入りて立てるぞ」といひければ、夫、「それをばいかがせむとする。いみじきことかな」といひて、枕上に長刀を置きたるをさぐり取りて、……

(今昔物語集「卷二八・四二」)

受身	……れる・……られる
自発	(自然と)……れる・(自然と)……られる
可能	……ことができる
尊敬	お……なさる・お……になる
使役	……させる
打消	……ない
過去	……た・……だった (伝聞過去の「けり」と、経験過去の「き」では訳が微妙に異なる。のちに詳述する。)
完了	……た・……てしまった・……てしまっ (きつと)……てしまっ・(必ずや)……てしま う
強意	(「強意」は別名、「確述」ともいう。) ……ている・……てある
存続	……だろう
推量	……らしい・……みたいだ (「推量」よりも不確実な事柄を示す。)
伝聞	……そうだ・……ということだ
意志	……う・……よう・……つもりだ
勧誘・命令	……がよい・……なさい
当然	(当然)……べきだ・(当然)……はずだ
断定	……だ・……である
反実仮想	もし……たとしたら……だろうに(実はそうではない)

(注)「人に猛く見えむと思ひて」↓人に勇ましいと見られようと思つて。「えもいはず」↓このうえなく。「兵だてける」↓勇者らしくふるまう。「ものへ行かむと」↓よそへ行こうと。「板間」↓屋根を葺いた板の間。「髪おぼとれたる」↓髪をふり乱した。「童盗人」↓童姿の盗人。「耳にさしあてて」↓耳に口を近づけて。

問一 線部①～⑪の助動詞の意味(文法上の呼び名)はなにか。次の中からあてはまるものを選び、記号で答えよ。

ア 意志 イ 推量 ウ 断定 エ 過去
オ 受身 カ 完了 キ 打消

① () ② () ③ () ④ ()
⑤ () ⑥ () ⑦ () ⑧ ()
⑨ () ⑩ () ⑪ ()

問二 線部 a～e の動詞の終止形を記せ。

a () b ()
c () d ()
e ()

問三 線部 f・g はともに形容動詞である。それぞれの「活用」の種類と「活用形」を記せ。

f 活用の種類 () 活用 () 活用形 ()
g 活用の種類 () 活用 () 活用形 ()

問四 線部 h・i を口語訳せよ。

h ()
i ()

読解の基礎編

10 敬語表現に慣れる

●敬語表現に慣れよう

基礎的な「敬語表現」に慣れながら、「敬意の方向」をとらえる方法を学ぼう。先に学習したように、「敬語法」とは、ある人物からある人物への「敬意」を示す表現である。当然そこには「敬意の方向」があり、これをとらえる力がつくと、古文への理解をいっそう深めることができるのである。

●ポイント①

☆主な「敬語」の復習——「文語文法の要点⑨」参照(P.54・55)

〈語形が同じか、似かよって混同しやすい「敬語」〉

- ① 「聞こす」 ↓ 「聞く」の尊敬動詞
「聞こゆ」 ↓ 「言ふ」の謙讓動詞
- ② 「奉る」 ↓ 「与ふ」の謙讓動詞
「奉る」 ↓ 謙讓の補助動詞
- ③ 「申す」 ↓ 「言ふ」の謙讓動詞
「申す」 ↓ 謙讓の補助動詞
- ④ 「はべり」 ↓ 「あり・をり」の謙讓動詞
「はべり」 ↓ 「あり・をり」の丁寧動詞
- ⑤ 「さぶらふ」 ↓ 「あり・をり」の謙讓動詞
「さぶらふ」 ↓ 「あり・をり」の丁寧動詞

基本演習 1

次の文を読んであとの問いに答えよ。

- (1) (天皇は)いとねんごろに聞きこえさせ給ふ。 (源氏物語「桐壺」)
- (2) 心よく数献すんけんに及びて、興にいらればべりき。 (徒然草第二・五段)
- (3) いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひける中に…… (源氏物語「桐壺」)
- (4) 一人の天人いふ、「壺なる御葉たてまつれ。きたなき所のもの聞きしめしたれば、御心地あしからむものぞ。」 (竹取物語「かぐや姫の昇天」)

問一 (注)「御心地あしからむものぞ」↓きつとご気分が悪いでしょう。

それぞれにあてはまるものを選び、記号で答えよ。

- ア 「尊敬」の動詞
- イ 「尊敬」の補助動詞
- ウ 「尊敬」の助動詞
- エ 「謙讓」の動詞
- オ 「謙讓」の補助動詞
- カ 「丁寧」の動詞
- キ 「丁寧」の補助動詞

問二 (1)～(4)の文を口語訳せよ。

- (1) ()
- (2) ()

●ポイント②●
☆「敬意の方向」のとりえ方

「敬語」にたくされた「敬意の方向」をとらえるためには、①「敬語の用法」、②「話し手」、③「聞き手」、④「動作の主」、⑤「動作の対象者」を明らかにすることが大切だ。

①「敬語の用法」 ↓(品詞に関係なく)「尊敬」「謙讓」「丁寧」の区別。

②「話し手」 ↓その「敬語」を「話す」か「書く」かした人。「作者」の場合も多い。

③「聞き手」 ↓その「敬語」を「聞く」か「読む」かした人。「読者」の場合も多い。

④「動作の主」 ↓「敬語」の主語。

⑤「動作の対象者」 ↓「敬語」で示された動作の対象となる人。「……に」「……を」「の」「……」にあたる場合が多い。

☆「敬意の方向」の法則

「敬意の方向」は、敬語の三用法をもとに、次のように法則

化

(3) ()

(4) ()

()

()

()

()

()

()

()

基本演習2

次の文を読んであとの問いに答えよ。

中納言 参りたまひて、御扇 奉らせたまふに、「隆家こそいみじき骨は得てはべれ。それを張らせて参らせむとするに、おぼろげの紙はえ張るまじければ、求めはべるなり。」と申したまふ。

(「枕草子」第一〇二段)

(注)「中納言参りたまひて」↓中納言(藤原隆家)が(中宮定子様のもとに)参上なさつて。「いみじき骨」↓すばらしい扇の骨。「おぼろげの紙」↓ありふれた紙。

問一 ——線部①〜⑤の「敬語」は誰から誰への敬意を示しているか。

例 1 にならつて、あとの語群を使い、記号で答えよ。

例 「作者」から「中宮定子」への敬意 II (ア) ↓ ウ)

① () ↓ () ② () ↓ () ③ () ↓ ()

④ () ↓ () ⑤ () ↓ ()

〈語群〉 ア 作者 イ 中納言 ウ 中宮定子

エ 扇

問二 ~~~~~線部を口語訳せよ。

() ()

される。(「↓」は「敬意の方向」を示す。)

a 「尊敬」……………「話し手」↓「動作の主」

b 「謙讓」……………「話し手」↓「動作の対象者」

c 「丁寧」……………「話し手」↓「聞き手」

文語文法の要点⑩

係り結び(1)

● 要点のまとめ ●

☆「係り結び」とは、文中に「係助詞」を置き、文末を特定の活用形
で結ぶことにより、「強意」や「疑問・反語」などを表現する方法
である。

[1] 「係り結び」の法則

「係り結び」の法則を表にまとめると次のようになる。

係助詞	文末の活用形	意味
ぞ なむ(なん)	連体形	強意
や(やは) か(かは)	連体形	疑問
こそ	已然形	強意

[2] 「ぞ・なむ(なん)・こそ」の係り結び → 確認演習①②

一文の中で強調したい語の下に係助詞をつけ、文末を、「ぞ・
なむ」の場合は連体形で、「こそ」の場合は已然形で結ぶ。最も一
般的な係り結びであり、口語訳も比較的容易である。

なお、「なむ」を「なん」とも表記する。

[3] 「や(やは)・か(かは)」の係り結び → 確認演習②

体言・活用語・助詞の下につけ、文末を連体形で結ぶ。ただ
し、活用語への接続は、「や(やは)」が終止形に、「か(かは)」が

確認演習

① 次の文を読んであとの問いに答えよ。

家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、^① 仮の宿りとは思へど、興
あるものなれ。よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りた
る月の色も、ひときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらら
ならねど、木だちものふりてわざとならぬ庭の草も心あるさまに、^② 實
子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覚えてやすらかなる
こそ、心にくしと見ゆれ。
(「徒然草」第一〇段)

(注)「あらまほしき」↓理想的だ・望ましい。「今めかしく」↓現代
風で・当世風で。「ものふりて」↓ふるめかしい趣があつて。
「たより」↓(ここでは)配置の具合。

問一 — 線部①、②の「こそ」は係助詞である。結びの語はなにか。
抜き出して記せ。

①の結び() () ②の結び() ()

問二 — 線部②の「こそ」を係助詞の「なむ」に改めると、続く「心にく
しと見ゆれ」の部分はどのように変化するか。「心にくしと見ゆれ」
を書き改めて記せ。

() ()

問三 ~~~~~線部「わざとならぬ庭」を品詞分解せよ。なお、活用語は、
その活用形も明らかにするものとする。

() ()
わ ざ と な ら ぬ 庭
() ()

連体形に接続する。「疑問」か「反語」の訳となるので、口語訳には十分注意したい。

④ 口語訳のし方

「疑問」の口語訳↓……か。……だろうか。

「反語」の口語訳↓……だろうか、いや、……ではない。

〔「反語」の訳には、「疑問」との違いを明らかにするため、必ず「いや、……ではない。」をつけ加えよう。〕

⑤ 「や」と「やは」、「か」と「かは」の関係

「疑問」や「反語」を示す係助詞の「や」に、「強意」を示す係助詞の「は」がつくと「やは」という形になる。これは「か」についても同様なのだが、「やは」「かは」をその語源にかえて二語とする説と、一語の係助詞とする説がある。口語訳上はどちらでもさしつかえないが、文末用法(P. 62～63)で「反語」を表す場合は、「やは」「かは」となることが多い。

⑥ 「疑問」と「反語」の識別

「や」や「か」が、その文中で「疑問」・「反語」のどちらで使われているかは、文法的な判断からは、結論が出せない。「疑問」と「反語」における接続関係や構文といった文法上の要素は変わらないからだ。唯一「疑問」と「反語」を識別する基準は、「前後の文脈に照らして、矛盾しないこと」だけである。つまり、文中で「や」・「か」、もしくは「やは」・「かは」に出会ったら、「疑問」・「反語」の二通りの口語訳をし、文脈に合ったほうを採用すればよい。

② 次の文を読んであとの問いに答えよ。

人の心すなほならねば、偽りなきにしもあらず。されども、おのづから正直の人、^②などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むはよのつねなり。いたりて愚かなる人は、たまたま賢なる人を見て、これを憎む。

「大きな利を得んがために、少しきの利を受けず、偽り飾りて名を立てんとす。」とそしる。おのれが心に違へるによりて、このあざけりをなすにて知りぬ、この人は下愚の性移るべからず、^③偽りて小利をも辞すべからず、かりにも賢を学ぶ。」。

(注)「いたりて愚かなる人」↓非常に愚かな人。「少しきの利」↓ち

いさな利益。「名を立てんとす」↓評判を世間へ上げようとしている。「知りぬ」↓次のようなことがわかってしまう、(それはすなわち……)。「下愚の性移るべからず」↓愚かな生まれつきが(賢い方へと)移ることができない。

問一 — 線部①「偽りなきにしもあらず」とは、結局、「偽りがある」というのか、「偽りが無い」というのか。その判断を記せ。

問二 — 線部②を、係助詞の「か」に注意しつつ口語訳せよ。

問三 — 線部③「べから」は「べし」の未然形である。意味を記せ。

問四 ()部にあてはまる語句はなにか。次から選び記号で答えよ。

- ア べきなり
- イ べきなる
- ウ べからず
- エ べからざる

問五 ……線部イ〜ハのそれぞれを品詞分解し、文法的に説明せよ。

- イ ()
 ロ ()
 ハ ()

【二】次の文を読んであとの問いに答えよ。

うぐひすは、文などにもめでたきものに作り、声よりはじめて様かたちもさばかりあてにうつくしきほどよりは、九重のうちに鳴かぬぞいと「A」。人の「さなむある。」といひしを、「さしもあらじ。」と思ひしに、十年ばかり「B」聞きしに、まことに「C」音せざりき。「D」竹近き、紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかし。「E」聞けばあやしき家の見どころもなき梅の木などには、かしましきまでぞ鳴く。よる鳴かぬもいぎたなき心ちすれども、今はいかがせむ。
 (枕草子「第四一段」)

(注)「めでたきものに作り」↓すばらしいものとして作り。「様かたちもさばかりあてにうつくしき」↓姿かたちもあれほど上品でかわいらしい。「九重」↓宮中。「さなむある。」↓そうなんですよ。

問一 「ふ」「部A」「E」に入れるのにふさわしい語句を、それぞれ次の語群の中から選び、記号で答えよ。

- 〈A〉ア わろし イ わろき ウ わろけれ
 〈B〉ア まかでて イ たちよりて ウ さぶらひて

- 〈C〉ア きても イ さらに ウ さすがに
 〈D〉ア さるは イ さらに ウ されば
 〈E〉ア さぶらひて イ まかでて ウ まゐりて
 A () B () C () D ()
 E ()

問二 —線部①・②は具体的にどのようなことか。簡潔に説明せよ。

① ()

② ()

問三 —線部③・④を口語訳せよ。

③ ()

④ ()

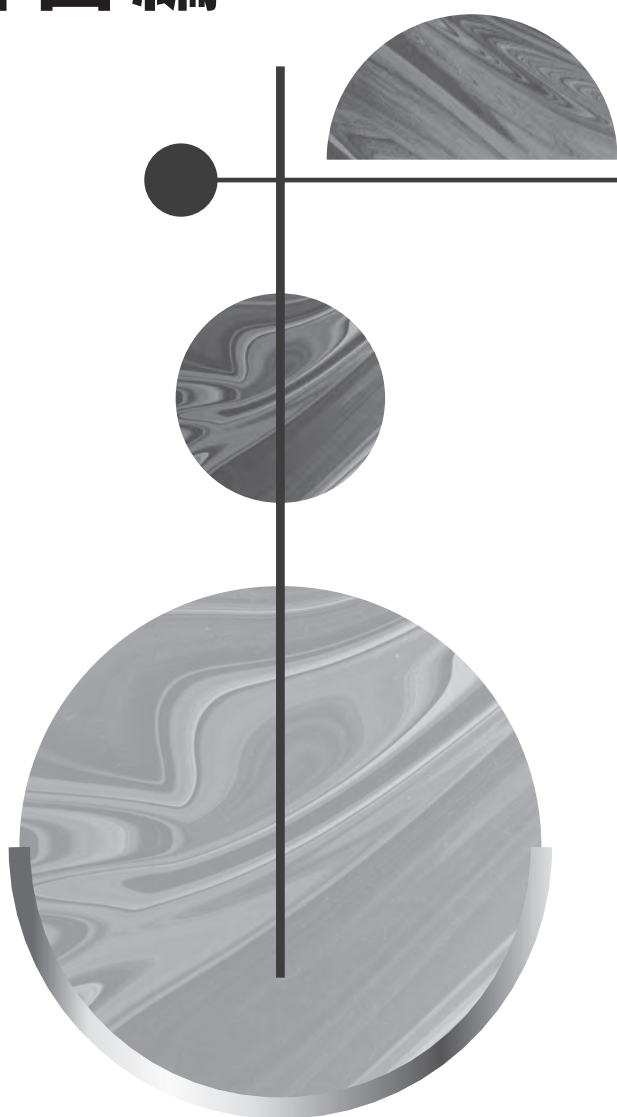
問四 ……線部a・bの「ぬ」の説明として正しいのはそれぞれ次の中のどれか。記号で答えよ。

- ア 「打消」の助動詞の終止形 イ 「打消」の助動詞の連体形
 ウ 「完了(確述)」の助動詞の終止形 オ 「完了」の助動詞の未然形
 エ 「完了」の助動詞の連体形
 a () b ()

高校ゼミ
Essence

古文I

解答編



① 歴史的かなづかい

(P. 4~5)

例題1 筆記練習

例題2 (あ)・(か)・(さ)・た・な・は・ま・や・ら・わ

例題3 (1) うえ (2) におい (3) おうぎ (4) まい

(5) おうぎ (6) ようきよく

例題4 (1) たまは(る) (2) にはか(に) (3) とほ(し) (4) つひ

(に) (5) とほ(る) (6) には (7) かひ (8) さづ(く)

(9) みづ (10) しほ (11) さいう (12) をとめ

例題5 ① 飢ゑ ② たぐひ ③ 植ゑ ④ いふ ⑤ 据ゑ

練習問題 ① きよみず ② まいり ③ おんな ④ おさなき

⑤ みどう ⑥ まえ

(解説) 例題1 「る」と「ゑ」の筆記練習を十分積んでおこう。「る」はひらが

なの「ぬ」に似ているが、もともとは漢字の「居」の草書である。また、「ゑ」

は、もともとは漢字の「恵」の草書である。

例題2 「五十音図」の「ア段」を順に書く問題も、よく口慣らしをして覚

えておこう。

例題3 「歴史的かなづかい」の基本的用法(●ポイント②●)を覚えたら、

あとは「習うより慣れろ」だ。どんどん実際に触れて読み慣れてしまおう。

例題4 ・練習問題 原則として、高校生は「歴史的かなづかい」が読め

ればよい。つまり「書けなくともよい」のだが、ここに挙げた基本的な単語

くらいは書けるようになりたいものだ。(2)の「を」とめは「可愛い女の子」の

ことだが、その「女」は「歴史的かなづかい」では「をんな」と書く。それなの

に「大人」は「おとな」だ。混乱しやすいところだが、もともと「を」は「wo」と

発音し、「お」は「o」と発音した。「歴史的かなづかい」は、みなそのような

古語の発音にならってできあがったものである。

② 古語と現代語(1)

(P. 6~7)

例題1 (1) 願い・愛情・心配・恨み (2) (キリギリスなどの) 秋に鳴く

虫の総称 (3) コオロギ (4) キリギリス (5) しみじみとして趣

深い (6) おもしろい・趣がある・上品だ (7) (小さくて) かわいら

しい (8) 愛らしい・かわいい

例題2 (1) が (2) が・を (3) が・の

例題3 (1) 桜の花の色はすっかり色あせてしまったな、そのように私の容

色も衰えてしまったな。私がむなしく、自身の世に処してゆくことで、も

の思いをしているうちに。 (2) 田子の浦に船で出てながめて見ると、

富士の山の高い頂きに、まっ白に雪が降り積もっている。 (3) 大空を

はるかながめやると、(月が美しく上がっているが、その月は) 春日にあ

る三笠の山にかつて出ていた月であろうか。 (4) 人里はなれた深い山

に、もみじ葉を踏みわけて鳴く鹿の声を聞く時、秋は(ひとしお)わびしく

感じられる。 (5) 秋の田の、刈り取った稲穂を見守る粗末な仮小屋の

草ぶきの屋根の編み目が荒いので、私の衣の袖は、しきりに露に濡れ続け

る(ことである)。 (6) 私の草庵は、都の東南の方で、このように(静か

に)住んでいる。(それなのに)世間の人は、私が世の中を嫌って住んでいる

宇治山だと言っているらしい。

例題4 問一 おぼつかなし 問二 ① 気がかりなもの ② まる見

えで(きまりがわるい) ③ とまさないで ④ それでも ⑤ 大

切な品物 ⑥ (ある)人のもとに使いにやったのに

(解説) 例題1 (1)~(7)までは現代語にも同じ単語があり(同音異義語)、た

いへんまぎらわしい。「きりぎりす」を「キリギリス」と訳してはならないし、

「あはれ」を「哀れ」の意だけで記憶しておくのは危険だ。特に「思ひ」などは、

動詞の「思ふ」とともに深い意味を持っているので、訳語が多岐にわたる。

こういう単語は辞典を活用してその意味をしっかりと感じよう。

例題2 この問題は比較的よくできただろう。しかし、文脈がもっと複雑

になると、「て」「に」「を」「は」と呼ばれる基本的な助詞さえも補えないこ

とがある。注意しよう。

げたくらいで、形は塩尻のようであった。／さらに旅を続けていくと、武蔵国と下総の国との間に、たいそう大きな川がある。それを隅田川という。その川のひとつりに集まってすわって、(京の方を遠く)思いやり、本当に遠くまでやってきたことだなあと……

例題3

- (1) 防人に行くのは誰の夫だろうと尋ねる人を見るうらやましさよ。何のもの思いもしないで。
 (2) 近江の海の夕波に鳴き騒ぐ千鳥の声を聞くと、心もおれて昔のことが思われることだ。
 (3) 稲つきをしているのであかぎれになっている私の手を、今夜も、御殿の若様が握って嘆いてくれることだろうか。
 (4) 夏の夜は、まだ宵のうちと思うまに明けてしまったが、(さて、これでは山まで行きつけない。)雲のどこに月が宿っているのだろうか。

4 音便

(P. 10 ~ 11)

例題1

- (1) ウ(音便) (2) ウ(音便) (3) 促(音便) (4) 撥(音便)

- (5) イ(音便)

例題2

番号	音便を含む部分	もとの形	音便の種類
①	いたう	いたく	ウ音便
②	叫んで	叫びて	撥音便
③	乗りあたって	乗りあたりて	促音便
④	飛んで	飛びて	撥音便
⑤	退いたりける	退きたりける	イ音便

必修古語の確認

- (1) 整理する。支配する。食べる。
 (2) 申し上げる。ごちそうする。……申し上げる。
 (3) 用意する。飾る。食事の用意をする。準備する。料理する。調伏する。
 (4) 準備する。料理する。調伏する。
 (5) 集めて一つにする。合奏する。調合する。優劣を競う(判断する)。

(解説)

例題1

●ポイント①●をマスタ―していれば難しくなくできるだろう。ちなみに、——線部を含むそれぞれの語の「もとの形」と「品詞」を示

すと、(1)「悲しく(形容詞)・(2)「うつくしく(形容詞)・(3)「取り(動詞)・(4)「死に(動詞)・(5)「高き(形容詞)」である。(4)の「死んで」は、もとは「死にて」であったが、「撥音便」がかかった関係で、接続助詞「て」が濁音になっている。

例題2

- ポイント①・②●には、「動詞」「形容詞」「助動詞」の「音便」のみ示したが、場合によっては——線部①「いたう」のような「副詞」にも音便が見られる。ただし、用例は少ない。

(口語訳)

例題1

- (1) 私の身の上は、(われながら)あまりに悲しいので、人にも語れない。
 (2) (背たけが)三寸ほどの人が、たいへん小さくて可愛らしい姿ですわっていた。
 (3) 木曾殿が、今井の手を取っておっしゃることには……
 (4) (生きていればこそよい)こともあるだろうが、死んでしまつては何の幸福も得られない。
 (5) 徳の高い僧が、大きな声で説経なされた。

例題2

新中納言(知盛)は使者をつかわして、「能登殿、あまり罪作りをなさるな。その相手が良い相手というわけでもあるまい。」とおっしゃったので、「それでは大將軍に組めということだな。」と心得て、源氏の船に乗り移り乗り移りし、わめき叫んで攻め戦う。ちよほど判官(義経)の船に乗りあわせて、あつと目をつけて飛びかかると、判官はかなうまいと思われたのであろうか、味方の船で二丈ばかり離れた船に、ゆらりと飛び移りなされた。

5 語の省略

(P. 12 ~ 13)

例題1

- (1) 絵は父が、字はわたしが書いた。
 (2) 犬が飛びついたと言う(ことだ)。
 (3) 雪(の景色)は、檜皮葺(の屋根)に積もった有様が、たいへんすばらしい。
 (4) 空から降って来るものは、雪が(最も)趣深い。
 (5) ここは(いったい)誰が住んでいるのか。
 (6) 高野山の徳の高い僧は、罪深いことを憎まない。
 (7) 桜の花は、一重であるのがよい。

例題2

夏は夜(が趣深い)。月の出る時分はなおさらのこと、闇の夜もやは

例題2

- ① エ
- ② カ
- ③ ケ
- ④ カ
- ⑤ コ
- ⑥ イ
- ⑦ ケ
- ⑧ コ
- ⑨ カ
- ⑩ コ
- ⑪ ウ
- ⑫ エ
- ⑬ ア
- ⑭ エ
- ⑮ エ
- ⑯ ア
- ⑰ ケ

(解説)

例題1 これは復習問題。P. 4～17までの「古文入門」編がよく学習できているかどうか、反省してみよう。「古文入門」では、みな大切な事柄ばかりを学んだ。一つとしておろそかにはできない。

例題2

品詞名を正確に把握することは、文法習得の第一歩だ。ここでは、「十品詞」のどれにあたるかを質問したが、学習が進むにつれて、同じ助詞でも、「格助詞」・「接続助詞」・「副助詞」・「係助詞」・「終助詞」・「間投助詞」と、用法によってさらに詳しい分類をしなければならなくなる。あわせて、一つ一つ学んでいこう。ところで、助詞の「は」は、口語文法では「格助詞」だが、文語文法では「係助詞」である。もちろん助詞には違いないのだが、「格助詞」と「係助詞」とでは、口語訳の際、大きな相違が生まれる。注意したい事柄である。また、形容詞に接尾語の「さ」がつくと名詞となる。これは現代語でも同じである(例「大きい」(形容詞)→「大きさ」(名詞))。

(口語訳)

例題2

都から東国へ行く道(東海道)の、その果て(常陸国)よりひたのくにも、さらにもっと奥まった方(上総国)で育った人(であるこの私)は、どんなにかまあ、みすばらしく田舎じみていたであろうに、それがどうしてそんな考えを抱き始めたのか、世の中に「物語」というものがあると聞いているが、それをどうにかして見たいものかと思いついて、する事もない退屈な昼間や、宵の家族の集まりの折りなどに、姉や継母といった人々が、この物語あの物語や、または光源氏のありさまの話などを、とどころどころ話すのを聞くにつけ、いっそう、もっと知りたいという気持ちがあつたのであるけれど、(姉や継母だとして)私の思うようには、どうしてそらで思い出して話してくれようか(いや、話してはくれない)。

読解の基礎

① 動作主(主語)をとらえる(1)

(P. 20～21)

基本演習1

- 問一 ① ア ② イ ③ オ ④ イ ⑤ ア
⑥ カ 問二 a ながつき b あない c ゆう
d つまど

基本演習2

- 問一 ① (この)僧都 ② ひと 問二 ③ (この)僧都
④ (ある)法師 問三 もし(仮に)あったならば

基本演習3

- 問一 ① (この)女 ② (この)雀 ③ (この)女
④ (この)雀 ⑤ (この)雀 問二 ほんの少しばかりの物

問三 雀こそいたく鳴くなれ、ありし雀の来るにやあらむ

必修古語の確認

- (1) (名詞)露。(副詞)少しも。(2) (名詞)夢。(副詞)決して。(3) ちゃんと。めつたに。(4) はなはだしく。(5) だんだんと。さまざまに。(6) すぐに。さっそく。(7) (名詞)現在。(副詞)ただいま。さし当たって。(8) 早く。急いで。(9) 非常に。ほんとうに。(10) ……しては……する。……しながら。(11) かえって。むしろ。

(解説)

基本演習1 場面の状況をしっかりとつかみたい。ここでは、「作者」が「ある人」にさそわれて、その人の友人(女性)宅をたずねたときのことを述べている。またその表現には、「ある人」に対してだけ「敬語」が用いられているという特徴がある。

基本演習2

問一 「動作主」をとらえる際には、しばしば、「指示語」や「人称代名詞」を含む部分が問題となる。「この僧都の」「こは」(人称代名詞)、「ある法師の」「ある」は「連体詞」である。 問三 「ましかば」は、しばしば「ましかば……ましかば……ましかば」のかたちをとって、仮定的内容を示す。詳しくはP. 41で学習する。

基本演習3

問一 会話文中の「動作主」をとらえる際には、その発言が誰から誰へのものかを確実に把握する必要がある。ここでは、「この女」から「雀」への発言である。

必修古語の確認

「副詞」の中には、通常、「打消語」ともなっていて用いられるものがある。ここでは(1)~(3)がそれにあたる。

(口語訳)

基本演習1

陰暦九月二十日ごろに、あるお方に誘われ申して、夜が明けるまで月を見て歩きまわったことがありましたが、(途中で、そのお方がふと)思い出しなされた家があつて、(そこに立ち寄り)、従者に取り次ぎを申しいれさせて(その家に)、おはいりになった。(その家は)荒れている庭に、露がいっぱいに降りていて、そのあたりに、客のためにとくに焚いたとは思われない香のかおりがほのかにかおつて、人目を避けてひっそりと住んでいる様子がたいそう趣がある。(そのお方は)ちょうどよいかげんの時間で出ておいでになったが、(私には)やはりその場の様子が優雅に思われて、ものかげからしばらく見ていたところ、(その家の女主人は、そのお方を送り出した後にも)妻戸をもうすこし押しあけて、月を見ている様子である。

基本演習2

この(盛親)僧都がある法師を見て、「しろうるり」という名をつけたのであつた。「(しろうるり)とはどんな物ですか。」と人が尋ねたところ、(僧都は)「そういう物をわたしも知らない。もしあるとしたら、きつとこの僧の顔に似ているだろう。」と言つた。

基本演習3

さて(それから)二十日ばかりたつて、この女のいたあたりで、雀のたいそう鳴く声がしたので、「雀がひどく鳴くようだ、以前の雀が来たのであろうか」と思つて、(女が外へ)出てみると、(やはり)その雀であつた。「感心なことに(恩を)忘れず、(ここに)やつてきたとは殊勝なことだ。」と(女が)言うと、(雀は)女の顔を見て、口からはんの少しの物(ひょうたんの種)を落としておくようにして飛び去つた。

文語文法の要点①

用言ー動詞①

(P. 22 ~ 23)

確認演習

① 向かひ・うつりゆく・書きつくれ

② ① 連体(形)

② 未然(形)

③ 連体(形)

④ 連体(形)

⑤ 連用(形)

⑥ 連用(形)

⑦ 連用(形)

⑧ 連用(形)

⑨ 未然(形)

⑩ 連体(形)

③ ① 四段(活用) ② 四段(活用) ③ 四段(活用) ④ 下二段(活用) ⑤ 下二段(活用) ⑥ 四段(活用) ⑦ 下二段(活用)

④ 四段(活用) ⑤ 四段(活用)

④ ① (ラ行)変格(活用) ② 下二段(活用) ③ 下二段(活用)

④ 四段(活用) ⑤ (カ行)変格(活用) ⑥ 四段(活用)

⑦ 上一段(活用) ⑧ 四段(活用) ⑨ 四段(活用)

⑤ 暗記事項

(解説)

① 問題文の(注)にも示したが、「日暮らし」は「一日じゅう」と訳し、「書きつくれば」にかかるので、副詞と判断する。また、「うつりゆく」「書きつくれ」はともに複合動詞である。複合動詞についてはP. 30 ~ 31で詳しく学習する。

② 「推しはから」、「思ひよそへ」はともに複合動詞である。

③ ①「降り」、②「明かし」は「降り明かし」という一語の複合動詞とする考え方もある。ここではあえて二語に分けてみた。同様に、⑤「濡れ」は続く「かかり」と、また、⑦「こぼれ」は続く「残り」と、それぞれ複合し、「濡れかかる」「こぼれ残る」という複合動詞であるという考え方もある。

④ ①「ラ変」、②「ア行下二」、③「ハ行下二」、⑤「カ変」、⑦「ワ行上二」などは、活用の種類ばかりではなく、その活用の行にも注意したい動詞である。

⑤ ここで暗記した動詞は①「サ行変格活用」と②「カ行変格活用」である。これらはP. 26 ~ 27で学習する事柄だが、あらかじめ、少しずつ頭に入れておこう。

(口語訳)

① することもなく退屈であるのにまかせて、一日じゅう、硯に向かつて、心に映つてゆくわけもないつまらないことを、とりとめもなく書きつけてゆくと、(そんな自分の態度は)ほんとうに、妙にきちがいじみしてくるのだ。

② 名を聞くや否や、すぐに(その人の)顔つきは推量されるような心持ちがあるが、(実際に)会ってみると、また、前もって想像していた通りの顔をしている人はいない。(また)昔の物語を聞いても、(その物語の中の家は)現在生きている人の家の、あのあたりであつたらうと思われ、(その物語の

中の人物も現在自分の知っている人(の中の誰か)に思いくらべられるのであるが、(これは私ばかりでなく)誰でもみな、こんなふうを感じるのだろうか。

③ 九月のころ一晩じゅう降り続いて夜を明かした雨が、今朝はやんで、朝日がたいそうはなやかにさし出たところに、庭の植え込みの(草木に降りた)露が(今にも)こぼれるほどぬれかかっているのも、たいそう趣が深い。透垣の羅文や軒の上に、かけわたしたくもの巣が破れ残っているのが、(また)それに、雨の降りかかっているのが、(まるで)白い玉を糸で貫き通したようなのは、ひどくしみじみと心をうごかさされ、趣が深い。

④ 昔、男がいた。女で、とてもこの男などがわがものとすることができそうにもない女を、(それでも)何年にもわたって求婚し続けてきたのであるが、やつとこのことで盗みだして(盗むように連れ出して)、たいそう暗い夜に逃げてきた。芥川という川のほとりを連れて行ったところ、草の上に結んでいた露を見て、(女は)「あれはなんなの」と男にたずねるのだった。

⑤ ① その身は死を迎えながら、財産が残るなどということとは、智者(徳の高い者)のすることではない。② 必ず来るはずの人のもとに牛車をさしむけて待っていると……

② 動作主(主語)をとらえる(2) (P. 24 ~ 25)

基本演習1 問一 ④・⑦ 問二 a 生き物を殺すこと。/むごいことをすること。 b 原因と結果の法則。/前世でおかした罪の報い。不運。

c 「仏・法・僧」の三つの宝。 問三 このような極悪非道な悪人であったので、国の人々はみな(源大夫を)恐れていた。

基本演習2 問一 ① ア ② ウ ③ イ ④ ア ⑤ ア
問二 a 効果 b すぐれた/徳の高い c 去年 d すぐにたいへんだ/困ったことだ

基本演習3 問一 作者/私 問二 作者(私)(の恋)・(淵)の反対語/瀬

問三 作者(私)(とその恋人(が別れる)・松(と)待つ(が掛けてある))

(解説) 基本演習1 比較的長い古文に接するときは、話題の流れを見失わ

ないように注意しよう。そのためには当然、常に「動作主」が誰なのかを念頭におく必要がある。古文に示される世界観は、仏教の影響を強く受けている。これは、「今昔物語集」のような「仏教説話」にかぎらず、全ての作品に共通していえることである。このために、基本的な仏教用語は記憶しておく必要がある。

基本演習2 一文(ワンセンテンス)の中でも「動作主」は次々と変化する。特に語法がとりいれられた文章は「動作主」の変化が激しい。「誰が」「誰にたいして」「何を」言ったのかを、常に考えながら読み進もう

基本演習3 短歌を読んで「動作主」がわからなくなったら、「作者」を「動作主」としてみよう。だいたい解決できるはずである。と言うのも、短歌は「作者」の感情を「作者の側」から詠む場合が多いからである。問三で問題としたように、「まつ」に「松」と「待つ」が掛けてあるような表現技法を「掛詞」という。短歌の技法については、P. 66 ~ 67で学習する。

(口語訳) 基本演習1 今は昔、讃岐の国、多度郡の()の郷に、名は

わからないが、源大夫と称する者がいた。(源大夫は)たいそう荒々しく、生きものを殺すことを毎日の仕事としていた。夜も昼も、明けても暮れても、山や野に行つては鹿や鳥を狩り、河や海に行つては魚を捕る。また、人の首を切つたり、手足を折らないという日は少なかった。また、因果の道理をわきまえず、三宝を信じなかった。まして法師と呼ぶような者は、とくに嫌い、そばにも寄せつけなかった。このような、極悪非道な悪人であったので、国の人達はみな(源大夫を)恐れていた。

基本演習2 源氏の君は、熱病(おこり)でお悩みになって、さまざまなお祈りなどをおさせになるが、効果がなくて、何度も病気がおこりになつたので、ある人が、「北山にある何々寺という寺に、すぐれた行者がおります。去年の夏も、熱病(おこり)が世間に流行して、人々がお祈りをしてもうまくききめが現れないので、てこずっておりましたのを、すぐにとめてしまおうという例がたくさんございました。やりそこないました時はたいへんでございますから、早くおためしになるとよろしゅうございます。」などと申し上げるので、行者を呼びに人をおやりになったところが、その行者は、「(私は)年老いて腰が曲がって、寺の外にも出られません。」と申すの

寒	け	く	ア	b
心	細	き	ア	d
あ	は	れ	ウ	b
や	ん	ご	ア	d
し	げ	く	ア	b
い	み	じ	イ	d
き	ろ	け	ア	e

② 問一 (1) なし(歌中では「なく」)
問二 あまりに風が激しいので (2) かなし(歌中では「かなしけれ」)

(解説) ① 「形容詞」の活用は「く・く・し・き・けれ・〇」という『本活用』と、「から・かり・〇・かる・〇・かれ」という「補助活用」の二段がまえになっている。本文では、それらを一つにまとめた活用表で示したが、暗記する際には、『本活用』・『補助活用』をそれぞれ縦に記憶した方が都合がよいだろう。「シク活用」は、「タ活用」に「し」をつければよい。また、「形容動詞」は、「ナリ活用」「タリ活用」ともに「ラ行変格活用」型の変化をする。ただし、「ナリ活用」は連用形に「に」、「タリ活用」は同じく連用形に「と」という形があるので注意しよう。

② 文中での形容詞は見落としやすいのだが、人が他者に伝えようとする意識は、その形容詞に込められている場合が多いので、形容詞の働きには常に注目しておこう。

(口語訳) ① さて、冬枯れのけしきは、秋にほとんど劣らないであろう。池の水ぎわの草に、散った紅葉がとどまって、(その上に)霜が大そう白く降りている朝、遣り水から(水蒸気が)煙のように立っているのはおもしろい。年もすっかり終わりに近づいて、だれもがみな忙しがっているところは、この上なく情趣が深い。(昔から)殺風景なものとしてながめる人もない(十二月の)月が寒々と澄んでいる二十日すぎの空は、実に心細い感じがするものである。御仏名(の法事が行われたり)荷前の使いが発するのなどは情趣深く尊い感じがする。(宮中では)諸儀式や(年末の)行事が多く、(それを)新春の準備と重ねて行いなされる様子は、すばらしいことであるよ。(一年の)

最後に当たる)大みそかの追儺から(すぐに)新年の四方拝に続くのがおもしろい。

② (1) もし、逢うということ(=深い関係になるということ)がまったくなかったならば、かえって、恋の相手(であるあなた)をも、また自分自身をも、恨まないでいるであろう。(2) 月を眺めていると、あれこれと限りなく、ものが悲しく感じられることだ。(何も)私ひとりのためにやってきた秋ではないけれども、(私ひとりだけに)もの思いをさせる秋のようだ。(3) あまりに風が激しいので、(ちょうど)岩に打ち当たる波のように、私ひとりだけがさまざまに思い乱れて、(あの人はその波を受ける岩のように)冷淡であるのに、私は恋のものの思いに悩んでいるこのころであることよ。

5 いろいろな表現 (1)

(P. 36 ~ 37)

基本演習1 問一 いま・ひときは 問二 a (あの)春の情景だと思われる b 駿河の国にあるという山の頂上

問三 c ウ d エ

基本演習2 問一 いみじう(「いみじく」のウ音便)・ものむつかし・おもしろし 問二 さやかなら 問三 勢多の橋はすっかり崩れていて、渡るのに苦労する。

(解説) 基本演習1 問一 「副詞」は意外なところに出現する。しかも、「いま」のように、名詞と同形のものがあり、本来「副詞」であるものを名詞として口語訳すると誤訳に陥るので注意したい。

基本演習2 問一 「形容詞」は音便化することが多いので、見落としかないように。 問二 正解は「さやかなら」である。これをしばしば、語幹の「さやか」だけを挙げて誤答することがあるが、形容動詞の活用表をしっかりと記憶して、特に未然形や命令形には慣れておきたいものだ。

問三 「「十わづらふ」の複合動詞が記憶されていれば難なく解けるだろう。このように、複合動詞の口語訳問題は知ってさえいれば簡単なのだが、知らなければ命取りになるものが多い。

(口語訳) 基本演習1 (1) 「しみじみとした情趣は秋が一番まさっている。」と、誰もかれも言うようであるが、それも一応はもっともなものとして、なおいっそう心も浮きうきする(おもしろい)ものは、あの春の情景だと思われる。

(2) (かくや姫が天皇に)さし上げた不老長寿の薬の壺に、(天皇は手紙を)添えてお使いにお与えになる。勅使には、つぎのいわかきという人をお呼びになって、駿河の国にあるという山の頂上に持ってゆく旨をご命令になる。そして、その山頂でなすべき方法をお教えることになる。お手紙と不死の薬の壺とをならべて、火をつけてもやすべきであるとご命令になる。その旨をうけたまわって、(つぎのいわかき)が武士たちをたくさん引きつけて山に登ったことから、この山を「(土に富む山)」、つまり「富士の山」と名づけたのである。

基本演習2 みつさかの山の麓に至って、夜も昼も、時雨やあらが降り乱れて、日の光もはつきりとは見え、たいそう陰気であつた。そこを出発して、犬上・神崎・やす・くるもとなどという所々を、別にこれといったこともなく通り過ぎた。琵琶湖の水面ははるばるとして広がって、なで島・竹生島などという島が見えている景色が、たいそうすばらしい。勢多の橋はすっかり崩れていて渡るのに苦労する。

文語文法の要点⑤

助動詞(1)

(P. 38 ~ 39)

確認演習 ● 1

番号	意味	助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
例	完了	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)
①	推量 意志	む	(ま)	○	む	む	め	○
②	打消	ず	ざら	ざり	ず	ざる	ざれ	○
③	過去	けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○
④	完了	り	ら	り	り	る	れ	(れ)
⑤	完了	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(ぬ)

② 問一 ① キ ② エ ③ ア ④ カ ⑤ エ ⑥ カ

⑦ ア ⑧ カ ⑨ エ ⑩ エ ⑪ カ

問二 a 見ゆ b あり c 出づ d 起く e す

問三 f ナリ(活用)・連体(形) g ナリ(活用)・連用(形)

問四 h 童姿の盗人で、髪をふり乱している盗人が

i それをどうしようというのだ。たいへんなことだな。

(解説)

① 助動詞の活用表は、「口ならし」をして暗記しよう。こればかりは暗記するしか、学習の方法はない。P. 40 ~ 41で、合理的な助動詞の暗記のしかたを解説するが、ここではその前に、代表的な助動詞の活用を記憶しておこう。

② 問一 助動詞の意味(文法上の呼び名)は、正確な口語訳を作るときに、きわめて重要なポイントとなる。しかも一つの助動詞に一つの意味とは限らない。この問題では比較的判断しやすい助動詞について、①と関連させながら質問した。①の活用表を参考にしつつ、丁寧に解答してみよう。

問二 「助動詞」の学習を始めると、先に学習した「動詞」についての事柄を忘れがちになる。「動詞」「助動詞」は口語訳上の二大ポイントだから、常に注意しておきたい。問三 「形容動詞」・「形容動詞」も古文理解のポイントだ。特に「ナリ活用」の「形容動詞」はしばしば文中に現れるので重視しよう。

(口語訳)

② 今となつては昔のことだが、受領の家来をして、人に勇ましいと見られようと思つて、このうえなく勇者らしくふるまった者がいた。／＼と家を出てよそへ行くこととしたおり、夫はまだ寝ていたが、妻は起き出して食事のことなどしようとしたところ、夜明けの月が(屋根を葺いた)板の間から家の中に差し込んでいて、月の光で、妻は、自分の影の映っていたのを見て、「髪をふり乱した童姿の盗人が、ものを盗もうとして、押し入ったな。」と思つたので、あわてふためいて、夫の寝ているところに逃げて行って、夫の耳に(口を)近づけて、こっそり、「あそこに大きな童姿の盗人で、髪をふり乱している盗人がものを盗もうとして入つて来て立っているわよ。」と言つたので、夫は「それをどうしようというのだ。たいへんなことだ

な。」と言って、枕元に長刀を置いていたのを手で探り取って……

⑥ いろいろな表現(2)

(P. 40 ~ 41)

基本演習1

(1) (まわりの)人々の非難をも気がねなさることもおできにならないような、(まさに)世間のうわさ話の種にもなってしまうようなおふるまいである。

(2) この(龍の頸の)玉は簡単には手に入れることができないだろうに。

(3) 親のご寵愛も一様であるとは言えないものである。

基本演習2

問一 ① 草の葉も、(沢の)水もいかに青々と見えてつづいて、
② 言いようもない(ほどの)清らかな水が、深くはないけれども、
問二 a 意志 b 完了 問三 c シク(活用)・已然形

基本演習3

問一 a ましか b ざら 問二 もしも心の中に主体があるとしたら、胸の中に多くの思いは入りこんでは来ないであろう。

(解説) 基本演習1

(1) は敬語の入った例文なので、少し口語訳しにくかったかも知れない。こうした例文は、まず、敬語を省いて口語訳し、大意をつかんでから、改めて訳すとよい。

基本演習2

問一の②の「えならざり」は、連語「えならず」の「ず」が連用形になったもの。

基本演習3

問一 「……ましかば……まし」の反実仮想の構文には、しばしば「打消」の助動詞がはいる。口語訳は当然、「……ダッタラ、……テハナクッタノニ」となる。 問二 ここにも、反実仮想の構文の間に「打消」の助動詞がある。口語訳に注意したい。

(口語訳) 基本演習1

正解例のとおり。

基本演習2

五月のころに山里に出歩くのはとてもおもしろい。草の葉も、(沢の)水もいかに青々と見えてつづいて、(沢水の)表面はなんともなくて草が生い茂っているので、(車で)どこまでもずんずんとまっすぐに行くと、下はいいようもない(ほどの)清らかな水が、深くはないけれど

も、(車付きの)男たちが歩むにつれて、飛沫を散らしたのは、実に気持ちがいい。(道の)両側にある生け垣の木の枝などが、(車体にひっかかって時折り)車室にまで入ってくるのを、あわててつかまえて折ろうと思うと、するりと手から滑って(車はそのまま行って)しまったのも残念だ。／蓬で、車輪の下に押しつぶされたのが、車輪が回転するにつれて、近くににおって来たその香も、たいへん風情がある。

基本演習3

鏡には色や形がないから、すべてのものの影がやって来て映るのである。もしも鏡に色や形があったとしたら、(すべてのものの影は)映らないであろう。／なにもない空間はどんなものをも包容することができる。われわれの心にさまざまな思いが自由に浮かんでくるのも、心の中に主体というものがいないからであろうか。もしも心の中に主体たる本心があるとしたら、胸の中に多くの思いは入りこんで来ないだろう。

文語文法の要点⑥

助動詞(2)

(P. 42 ~ 43)

●確認演習

① 問

(1) (しか)已然形 (き)終止形 (口語訳) 「その時代にはこのようでした」と申し上げなされた。(2) (け

れ)已然形 (ける)連体形 (口語訳) 株を掘った跡が大きな堀

になったので、(人々は)「堀池の僧正」と呼んだ。(3) (し)連体形

(ぬる)連体形 (口語訳) 都を出てあなたにお目にかかろうと思っ

て、こうしてはるばるやって来たのに、来たかいてもなく、あつてなく別れてしま

うことだなあ。(4) (たり)連用形 (し)連体形 (口語訳)

「ほんとうにまあ、情けないお心だ」と言っていたのは、おもしろかった。

(5) (べかり)連用形 (しか)已然形 (口語訳) 恐ろしいことの中

でも、ことに恐ろしそだったのは、なんといつても地震であるよと思

いました。(6) (に)連用形 (けり)終止形 (口語訳) 「無駄な出

歩きは、意味のないことよなあ。」と思って、訪ねてこなくなりました。

② (1) (る)存続(完了) (2) (れ)受身 (ぬ)完了

(3) (ざる)打消 (ず)打消

まった。「今世間で評判の高い光源氏を、こうした機会にお拝みになりませんか。(中略)」と言って、立ち上がるけはいがあるので、源氏はお帰りになつた。

⑩ 敬語表現に慣れる (P. 56 ~ 57)

基本演習1 問一 (1) エ (2) キ (3) エ (4) ア

問二 (1) 天皇はとても懇切に申し上げあそばされた。(申し上げなさい) (2) お気持ちよく数杯のお酒をお飲みになって、たいへんお楽しみになりました。 (3) どの天皇の御代であつたらうか、女御や更衣がおおぜい天皇にお任せ申していらつしやつた中に…… (4) 一人の天皇が言うには、「壺の中にある御葉を召し上がりなさい。(お飲みくださいませ)けがれた下界のものを召し上がったので、きつとお気持ちが悪いでしょう。」

基本演習2 問一 ① ア→イ ② ア→ウ ③ イ→ウ

④ ア→ウ ⑤ ア→イ
問二 ありふれた紙は張ることができませんいから。

(解説) ●ポイント①●でとりあげた「混同しやすい敬語」は、例示した敬語を相互によく比較して覚えておこう。また、●ポイント②●でとりあげた「敬意の方向」は、作中の人物関係を知るうえで有効な手段である。上級学年に進んでから、さらに役立つ事柄なので、その方法を反復練習しながら身につけておこう。

(口語訳) 基本演習1 正解例のとおり。

基本演習2 中納言様が(中宮様のお前に)参上なさつて、御扇を献上なさるときに、「私はすばらしい(扇の)骨を手に入れました。それを張らせて献上したいと存じますが、(それほど)骨ですから)ありふれた紙は張ることができませんいから、(この骨にふさわしい紙を)さがしております。」と申し上げなさい。

文語文法の要点⑩

係り結び(1)

(P. 58 ~ 59)

●確認演習 ● ① 問一 ① なれ(断定)の助動詞「なり」の已然形

② 見ゆれ(ヤ行下二段活用動詞「見ゆ」の已然形)

問二 心にくしと見ゆる

問三 わざと||副詞/なら||助動詞・断定・なり・未然/ぬ||助動詞・打消・ず・連体/庭||名詞

② 問一 偽りがある 問二 どうしてないことがあるうか、いや、いる。(反語) 問三 可能 問四 ウ

(解説) ① 問一・二ともに、「係り結び」の基本的設問。問二は、問一を逆転した質問のしかただが、出題意図は同じである。

② 問二は「反語」の構文であるから、「……だろうか、いや、……」と明確に口語訳すること。問三は「助動詞」の反復練習問題。「助動詞」の記憶をとりもどそう。問四は文体の特徴をつかむこと。

(口語訳) ① 住まいというものが、よく調和がとれていて、理想的につくられているのは、(どうせ短い一生を託すだけの)仮の宿であるとは思ふもの、やはり心をひかれるものである。身分や教養のある人がゆつたりとした静かな気持ちで住んでいる所は、そこにさしこんでいる月の光も、一段としみじみと感ずるものであるよ。現代風にはでやかなところは、庭の木々も古びた趣があつて、特に手入れをしたとも見えない庭の、その草にも深い趣がある様子で、「すのこ」や「すいがい」の配置もおもしろく、ちよつと置いてある道具類も古風でいやみがない住まいは、ほんとうに奥ゆかしいものだ感ずる。

② 人の心はすなおなものではないから、偽りが無いわけではない。しかしながら、まれには、うそ偽りのない、心の正しい人も、どうしてないことがあるだろうか、いや、いる。自分がすなおではなくとも、人が賢くてりつぽであるのを見てうらやむのは、世間一般のことである。非常に愚かな人は、まれにいる賢くりつぽな人を見て、その人を憎むことがある。(そして)「(あの人は)大きい利益をあげたいために、小さい利益は受けつけないで、偽つて(表面を)飾り、(賢人であるという)評判を世間にあげよう

としている。」と悪口を言うのである。(賢人の心が)自分の(愚かな)心とちがっているために、このような悪口を言うことによって、(次のようなことがすっかり)わかってしまうのである、(つまり)この人はいったって愚かな生まれつきで、「愚」から賢「に」移ることはできないし、偽りにでも小さい利益をことわることもできないし、かりにも、賢人の賢いところをまねすることができない、ということである。

⑪ 助詞による表現 (1)

(P. 60 ~ 61)

基本演習1

問一 格助詞↓②・⑥ 接続助詞↓①・④・⑨・⑩

副助詞↓⑦ 係助詞↓③ 終助詞↓⑤・⑧ 問投助詞↓なし

問二 a 助動詞・打消推量 b 形容動詞 c 形容詞 d 副詞

基本演習2

問 (動作の共同者)③ (使役の対象)② (手段、方法)①

(解説) 「助詞」の学習のポイントは、現代語との違いが大きい、「接続助詞」「副助詞」「係助詞」「終助詞」を中心に、その理解を深めることである。もちろん、試験問題としては、基本的な「格助詞」なども出題されているが、古文理解を深めるのは、なんとといっても先に挙げた四種類の助詞である。

(口語訳)

基本演習1

(1) (二人はかたく)約束しましたよね。おたがいに

袖の涙をしぼりながら、あの末の松山を波が越すことのないように、私たちの仲も決して変わることはないように。

(2) (私が死んでも私を)「ああ、かわいそうだ」と言ってくれるはずの人はだれひとりとして思い浮かばず、私はこのまま、(あなたを思いこがれながら)きつとむなしく死んでしまうことだろう。

(3) あなたに会うためにはどうなろうとかまわないと惜しくも思わなかった私の命までも、(こうして会ったあとではかえっていつまでも会えるように)長くあつてほしいと思うようになりまして。

(4) 「(夜が)明けてしまうと、(やがて)日は暮れるもの(そうすればまた会える)」とはわかっていますが、それでもやはり恨めしい夜明け方です。

基本演習2

問 (1) 長い爪で眼をにぎりつぶしてやろう。

(2) 船頭に命じて、幣を神様にお供えさせる。
(3) おおせいで傷をおわせ、うつぶせにしてしばった。

文語文法の要点⑪

係り結び(2)

(P. 62 ~ 63)

●確認演習●

① 問 (1) あらむ (2) いふ (3) はべる
(4) おはせむ (5) あらめ・ありけめ

② 問 (1) (係助詞)こそ・(結びとなるべき語)切れ失す (2) (係助詞)か・(結びとなるべき語)らめ

③ (1) 「確かでないことであつた場合には都合が悪い」と思つて、何も言わないで、そのままで終わった。 (2) (雀の子は)どこへ参つたのでしよう。……カラスなどが見つけたら大変なのに。 (3) 葎が深く茂つたこの家のさびしいところに、人は誰も訪ねてはこないけれど、秋だけはいつもと変わらずやつて来たことだ。

(解説) ここでは「係り結び」の注意すべき用法をまとめたが、①は、単に「結び」とどまらず、(4)では「敬語」の知識、(5)では「助動詞」の知識も含めて質問した。②は品詞分解を丁寧に行い、「結びとなるべき語」を正確に抜き出すこと。③の(1)・(2)は「懸念」を示す「係り結び」、(3)は「こそ……已然形、……」の構文。

(口語訳)

① 本文のとおり。

② (1) たとえ耳や鼻は切れてなくなつても、命だけはどうして助からないことがあるのか、いや、助かる。
(2) 今、味方には東国の兵が何万騎いるだろうが、戦陣に笛を持って来る人はまさかまい。

③ 正解例のとおり。

⑫ 助詞による表現 (2)

(P. 64 ~ 65)

基本演習1

問 ① つつ ② で ③ だに ④ ものを

基本演習2

問 (拳げているもの)はたるばかりの光

① 随筆・日記(1)

(P. 68 ~ 69)

【一】 問一 知らずしもあらじ、ありのままに言はんはをこがまし

問二 ② はつきり言い聞かせてやるのが、思慮ある応答のしかたに聞こえるにちがいない。 ③ 逆に質問の(手紙を)送るのは、まことに不愉快なことである。

問三 人からものを問われた時に、相手を迷わせるようないい加減な返事をする。

問四 C・E 問五 イらん

現在推量の助動詞「らん」の連体形。 ロ らゝク活用 of 形容詞「なし」の未然形語尾の一部。 んゝ推量の助動詞「む」の連体形。 ハ らゝ完了の助動詞「たり」の未然形の一部。 んゝ婉曲 of 助動詞「む」の連体形。

【解説】 問一 引用部を問われたら、まず、引用の格助詞「と」をさがすとよい。

問三 全体の口語訳ができて、か否かを見る問題。一部分だけにとらわれず、視野を大きく持とう。

問四 主語をとらえるという、基本的問題。

問五 かなり高度な品詞分解問題。「……の一部」という解答法に慣れよう。

【口語訳】 人がなにか尋ねた場合に、(尋ねられた人が)「あの人はこれくらいのこと(を)知らないこともなからう。事実どおりに答えるの(を)ばかげている。」「でも思うのであろうか、(聞く人の)心を迷わせるように返事をした(り)するのは、よくないことである。知(っ)ていること(でも)、な(お)い(っ)そう(は)つきり(知(り)たい)と思(っ)て尋(ね)て(い)る(の)か(も)し(れ)な(い)。また、ほん(と)う(に)知(ら)ない(人)も(ど)う(し)て(い)ない(こ)と(が)あ(る)だ(ら)う(か)、い(や)、き(っ)と(い)る(だ)ら(う)。(だ)か(ら)は(っ)つきり(言(い)聞(か)せ(て)や(る)の)が、思(慮)あ(る)応(こ)答(の)し(か)た(に)聞(こ)え(る)に(ち)が(い)ない(だ)ら(う)。相(手)の(人)は(ま)だ(聞(き)知(っ)て(い)ない(こ)と(を)、自(分)が(知(っ)て(い)る(こ)と)に(ま)か(せ(て)、「ほん(と)う(に)、誰(ぞ)そ(れ)さ(ん)の(こ)と)に(は)驚(き)ま(し)た(よ)。」な(ど)と(だ)け(手(紙)で)言(っ)て(送(る)の)で、(受(け)取(っ)た(相)手(は)わ(け)が(わ)か(ら)ず)、「い(っ)た(い)ど(ん)な(こ)と(が)あ(る)の)か。」と(逆(に)質(問)の(手(紙)を)送(る)の)は、(そ(の)尋(ね)る(人)に)と(っ)て(は)ま(ま)に(不)愉(快)な(こ)と(で)あ(る)。世(間)で(は)

もう言いふるされてしまったこと(でも)、まれには聞きもらす人もあるから、あいまいなところがないように言(っ)て(や)る(こ)と(は)、ど(う)し(て)悪(い)こ(と)が(あ)る(う)か、い(や)、悪(く)は(な)い。こ(う)い(う)こ(と)は、も(の)ご(と)に(経(験)の)足(り)な(い)人(が)よ(く)す(る)こ(と)で(あ)る。

【二】 問一 A イ B ウ C イ D ア E イ

問二 ① 宮中では鳴かないということ。 ② 宮中でも鳴かないとい(う)こ(と)は(な)い(だ)ら(う)と(い)う(こ)と。 問三 ③ 卑(し)い(者)の(家) ④ 寝(ぼ)けた(よ)う(な)感(じ)が(す)る(け)れ(ど)も

問四 a イ b ウ

【解説】 問一 Aは「係り結び」に注意すること。 Bは「敬語」の問題。 Cは「副詞」、Dは「接続詞」、Eは再び「敬語」の問題。このように、問題形式は同じでも、問いの本質が全く異なることがよくある。これは受験者の発想を混乱させるねらいがある。注意しよう。

【口語訳】 うぐいすは漢詩文などにもすばらしいものとして作り、声をはじめとして、姿形もあれほど上品でかわいらしいのに(そのわりには)、宮中で鳴かないの(が)たい(そ)う(よ)く(な)い。人(が)「そ(う)な(ん)で(す)よ(う)ぐ(い)す(は)宮(中)で(は)鳴(き)ま(せ)ん(よ)。」と(言)っ(た)の(を)、(そ(の)時)は、「そ(ん)な(こ)と(も)あ(る)ま(い)。」と(思)っ(た)が、(私)が(十)年(ほ)ど(宮(中)に)お(仕)え(し)て(い)て(聞(い)た)の(に)、ほん(と)に(全(く)う(ぐ)い(す)の)声(が)し(な)か(っ)た。と(は)い(っ)て(も)、(宮(中)の)竹(の)近(く)の(紅)梅(も、(う)ぐ(い)す(が)たい(そ)う(よ)く(通)つ(て)来(そ)う(な)縁(のある)こ(と)ろ(な)だ。(こ)ろ(が)宮(中)か(ら)退(出)し(て)聞(く)と、卑(し)い(者)の(家)の、み(ば)え(も)し(な)い(梅)の(木)な(ど)に(は)、や(か)ま(し)い(ま)で(に)鳴(い)て(い)る。夜(鳴)か(な)い(の)も(寝)坊(だ)と(い)う(気)が(す)る(け)れ(ど)、(そ(れ)は)習(性)だ(か)ら)今(さ)ら(ど)う(し)よ(う)も(な)い。

② 随筆・日記(2)

(P. 70 ~ 71)

【一】 問一 月末 問二 ① a ② b ③ c ④ 1

問三 「手紙の代作などできません」とは申し上げられません。

問四 日ごろ物言ひつる人 問五 日ごろ物言ひつる人

問六 A 問七 (はじめ)あまり (終わり)待るは

問八 a イ b カ c ア